

〔研究ノート〕

陶磁器における人物図の表現

—白鶴美術館所蔵「五彩武人図有蓋壺」

今年の夏に開催した「福徳円満を求めて—中国 元・明時代の華やかな工芸—」展では、元や明時代に発展し、広く流行した戯曲や小説が陶磁や漆工など工芸の文様図案として取り入れられた作品を展示しました。その代表的な作品として白鶴美術館から拝借した明時代の陶磁器「五彩武人図有蓋壺」(図1~3 総高38.5cm 口径14.1cm 胴径26.6cm 景德鎮窯)は、色鮮やかな群像表現が特に魅力的といえます。生き生きと描きだされた人々は様々な動きをしています。画題となる物語は確定されていないため、本稿では人物像や構図・絵画表現から内容の分析を試みます。

「五彩武人図有蓋壺」(以下、本作品)は、全体に赤色を基調として青花を用いず、赤・黒・青・緑・黄、黄緑の上絵付けのみで装飾されています。壺の胴部中央に大勢の人物が登場する物語の場面があらわれ、壺の周りを一巡して見ると、なかなか物語絵巻のようです。しかし画面は一方方向に展開するのではなく、画面の中心は正面向きの人物が椅子に坐し、武術を行う二人の人物を眺めている部分とみられます(図2)。周囲には大勢の武人や官人が画戟(矛の一種)や屈刀・銭(大型の斧)・鎗(柄の先端に球状の錐を付けた打撃武器)などの武器や冊子本を持っています。上半身はだけた二人が行う武術のポーズは、明の万曆三十五年(1607)に完成し、1609年に出版された『三才図会』

人事七巻の拳法図に見られる「探馬」と「拗車輦」(図4)にあたることを白鶴美術館学芸員の田林啓氏より御教授いただきました。片腕を大きく振り上げ、または両腕を真横に広げて片足を踏み出す動きが良く似ており、拳法図の組み合わせと同様に描かれています。

壺の反対側の面(図3)には、一人の若者が旗台の前を走り抜ける様子があらわされています。若者は頭巾に山鳥(鷗)の羽根を挿し、左手に旗竿を持ち、後ろを振り向きます。若者が右手に騎馬の鞭を持ち、その後方には赤い帽子を被った人物が馬の轡に手を掛けて引いていることから、若者が馬から下りて駆け出した瞬間と見られます。武術を眺める人物に若者が急な知らせを運んできたのでしょうか、慌ただしくも活気に満ちた様子がうかがえます。描かれた場面は、武術を眺める人物とこの若者を中心に展開されているように見えます。彼らを囲む大勢の武人や兵士に争う人々はおらず、戦闘の場面では無いようです。

ここで、武術を眺める人物の場面に注目して検討します。この人物は椅子に坐り、正面を向いて、明らかに周囲の人物とは異なる堂々とした風体で表現されています。装束にも特徴があり、頭には烏紗折上巾を被り、両肩に龍文が付いた黄色の衣を身に付けています。烏紗折上巾は隋代に始まった皇帝以下朝廷の官人の被り物で、黄袍(黄色い衣)は隋代以降に皇帝の服とされました。

この人物が武術を眺める行為にも意味がありそうです。『三才図会』の中で、「探馬」には人物図の上に「探馬伝自太祖、諸勢可降可変、侵攻退閃弱生強、接短拳之至善」と記され、北宋の太祖より伝えられたとされます。同様の内容は明時代の兵法書である茅元儀『武備志』(明・天啓元年[1621]編纂・刊行)にも見つけられ、巻九十に「古今拳家、宋太祖有三十二勢長拳、又有六步拳、猴拳、回拳、…」とあります。このような記述がいつまで遡って確認できるかは不明ですが、明代には北宋の太祖(趙匡胤、在位960—976年)が「三十二勢長拳」を編み出したとする認識があったことは確かといえます。趙匡胤は五代十国時代最後の王朝である後周から禅譲を受けて宋を建国した人物で、禅譲の前日に周囲の軍人たちに皇帝になるように促され、皇帝がまとう黄袍を受け取ったとされます。さらに検討は必要ですが、人物の表現や特定の武術のポーズとともに描かれていることから、本作品の画題は北宋の太祖である趙匡胤にまつわる故事の可能性はあるのではないかと考えられます。

場景表現に目を向けると、二つの場面で中心となる人物の左右上方には、城壁や遠くの岩山または土坡の上に武器の先端が並んで見えています。このような表現は、明時代に流行した小説の挿絵にも認められます。明末刊行の『李卓吾先生批評浣紗記』は春秋時代の呉越の争いに関する話である『浣紗記』に評語と挿絵が入れたものです。呉越の戦闘場面(図5)では二頁にわたる画面の左右上端部に、岩や城壁の上から多くの武器の先端や兵士の一部をあらわすことで、そ

に居並ぶ多数の兵士たちが示されています。限られた画面内に効果的に描写する冊子本の挿絵に見られる手法が、本作品の画面表現に取り入れられていることがうかがえます。趙匡胤は若い頃より武勇伝が多く、五代十国の多くの国々を平定して建国したことから、武術とともに、本図像の人物が趙匡胤であることを示す要素の一つとして兵士が添えられているのではないかと考えられます。

本作品には、器形と上下の文様がほぼ共通する類品が出光美術館とフランス・ギメ美術館にそれぞれあり、これら二点は胴部中央の主文様部に配される雲の表現や人物の表情などがよく似ています。ギメ美術館品の画題は三国時代を題材とした歴史小説『三国志演義』の一場面である可能性が指摘されています(D・リオン=ゴールドシュミット『明の陶磁』駿々堂出版 1982年、及び、ギメ美術館の題箋)。今のところ挿絵版面に同図像は見つけれないものの、人物の描写から『三国志演義』の有名な一場面である「三英戦呂布」の可能性が考えられますが、確定するまでには至っていません。これら三作品の関係とそれぞれの内容の解説が、本作品を深く鑑賞するための今後の課題と考えます。

(瀧朝子)
※図1~3は特別企画展図録『福徳円満を求めて—中国 元・明時代の華やかな工芸—』大和文華館 2019年7月、図4は『明』王圻・王思義編『三才図会』上海古籍出版社 1988年、図5は『明代版画選』(初編)国立中央図書館(台湾) 1969年3月から複写させていただきました。



図1



図2



図3



図4



図5